

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04659

研究課題名(和文) 小学校児童の好む英語の授業と嫌いな英語の授業の質的分析

研究課題名(英文) A qualitative analysis of elementary school English lessons with students' high enjoyment and those with low enjoyment

研究代表者

猪井 新一 (INOI, SHINICHI)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：80254887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校英語授業に関して児童の好意度授業および低好意度授業の質的分析を行った。好意度授業に見られる主な特徴は、(1) 身体運動や具体的体験活動がある、(2) Interactiveな活動がある、(3) 変化のある言語活動がある、(4) 扱う構文が限定的である、(5) 楽しく、安心して学習できる学習環境である、の5つである。

一方、低好意度授業に見られる主な特徴は、(1) 過度な反復練習、(2) 扱う項目(単語、動画)が多い、(3) 安心して学習できない雰囲気、(4) 形式(form)に着目しすぎるものの、4つである。これらは第2言語習得の指導原理に反する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2020年度より小学校英語の教科化および中学年度での導入が全面的に実施されるようになった。本研究を通して、児童はどのような英語の授業を好み、どのような英語授業は嫌いであるかについて、ある程度分かった。小学校の学級担任または外国語(外国語活動)担当者が英語授業を計画・実施する際には、本研究から得られた好意度英語授業の特徴を積極的に取り入れ、一方、低好意度英語授業の特徴は、できるだけ排除するように努めることが大切である。そうすれば、英語嫌いの児童をできるだけ生み出さなくてすむと思われる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to discern any characteristics that may contribute to how much elementary school students enjoy English lessons. English lessons with students' high enjoyment and those with low enjoyment were qualitatively analysed. The analysis of the former revealed the following characteristics: practice involves (1) physical or manual movements, (2) interaction, (3) variation, (4) a small number of new items, and (5) a safe, friendly, and enjoyable classroom atmosphere. The analysis of the latter indicated the following characteristics: practice involves (1) excessive repetition, (2) a large amount of new items, (3) anxiety-causing classroom atmosphere, and excessive focus on form.

研究分野：外国語教育

キーワード：小学校英語 外国語教育 第2言語習得 意味 形式 安心して学習できる雰囲気 反復練習 やり取り

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

児童が英語の授業を好きになることはとても重要である。児童の英語の授業の好き嫌いの調査には、アンケート調査が実施されることが多い(猪井, 2014; 植松, 2014; 淵上, 2008; ベネツ, 2011)。英語授業の好き嫌いの具体的な理由についても、アンケート調査の中で選択肢を挙げ、児童に選ばせる方法が一般的である。しかし、児童が好きな英語授業とは具体的にどのようなものかについて、具体的な授業分析の観点から検討した研究はまだ少ない。太田(2013)は児童が好む英語授業とはどのようなものかについて、反復練習が多い活動のビデオと、児童と教師のインタラクションの多い活動のビデオの2種類を作成し、児童に視聴させ、どちらの方が好きかを選ばせた。その結果、児童はインタラクションの多い活動を好む傾向があると報告している。ただ、実際の英語授業そのものを分析したわけではなく、児童の英語授業の好き嫌いを引き起こす他の具体的な要因については言及していない。

猪井(2014)では、茨城県内の公立小学校を訪問し、32クラスの英語授業参観・録画およびアンケート調査を実施した。児童の英語授業の好意度について、様々な要因との関連性を分析した。その結果、児童の英語授業の好き嫌いは、年間授業時数、TTにおける主指導者(ALT、学級担任、外国語活動担当教諭)、学級担任の英語教員免許の有無、学級担任の英語および英語授業に対する態度、児童の英会話教室通学率、英語特区・非特区などの外的要因とはあまり関連性がなかった。

そこで、猪井(2015)は英語授業そのものの分析を行った。上記32クラスのうち児童の授業好意度順位1位のクラスでは、チャンツを取り入れた反復練習、児童同士および児童とALTとのインタラクション、児童の積極性が見られた。順位2位のクラスは、普段日本語では友達に聞くことはないインタビュー活動が含まれていた。一方、好意度最下位の32位クラスは、単語や英文の単純な反復練習が授業の大半を占めていた。また、順位31位クラスは英文のパターンブッキングを行い、授業のスピードがとても速かった。しかし、わずか4クラスの授業分析であり、児童の英語授業の好き嫌いの要因を特定するにはもっと数多くの英語授業を分析する必要があった。

### 2. 研究の目的

小学校英語授業において、児童はどのような授業を好み、どのような授業を嫌うのであろうか。そこには、様々な要因が関係していると思われるが、本研究では、主に児童の好意度の高い英語授業(高好意度授業)と好意度の低い英語授業(低好意度授業)を比較しながら、授業の質的分析を行い、児童の英語授業の好き嫌いの要因を明らかにしようとするものである。

### 3. 研究の方法

#### 1) 研究方法の概略

当初の研究方法では茨城県内の公立小学校訪問は20校程度を計画していたが、実際は7校、11クラスにとどまった。訪問数が限られ最大の原因は、勤務校のその他の業務(平成28~30年度文部科学省委託事業『小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習開発・実施事業』)等による多忙さにより、本研究に当てる時間が相当制限された。分析クラス数がある程度確保するために、前回の科研費調査のデータの一部を再調査した。

授業分析の際に、授業内で実施された言語活動の質的分析に重点を置き、これまでの第2言語習得の文献調査も並行して実施した(Curtain & Dahlberg, 2010; Dörnyei & Ushioda, 2011; Ellis, 2008; Muñoz, 2007; Nation & Newton, 2009; Ortega, 2007 など)。外国語指導の原理・原則を探り、それらの観点から、高好意度授業および低好意度授業、とりわけ授業内容や言語活動の展開の仕方などを、質的に分析した。児童の英語授業に対する好意度は、アンケート調査により数値化し、クラス全体の平均値を算出した。アンケートへの自由記述からは、当日の授業の活動で好きな活動と好きでない活動、およびその理由を調査した。

#### 2) アンケート項目

児童の英語授業の好意度を調査するうえで、アンケート調査を実施した。アンケート項目は5項目あり、4項目は選択肢形式、1項目は自由記述であった。アンケート項目の1つ目は英語授業好意度、2つ目は英語授業参加度、3つ目は英語学習意欲に関するもので、それぞれ4つの選択肢から1つ回答を選ぶものであった。数字が大きくなると、それだけ肯定的な回答ということになる。ここでは、便宜上本研究に直接関係のある項目(1と5)のみを記載する。

##### [アンケート項目]

1. 学校の英語の授業は好きですか。

4) とても好きである 3) まあまあ好きである 2) あまり好きでない 1) 全く好きでない

5. 今日の英語の授業で、楽しかったことや、楽しくなかったことはありましたか。また、その理由を書いてください。なかった場合は、「なし」と書いてください。

#### 3) 分析対象クラス

今回訪問した11クラスの人数、好意度の平均値等は表1の通りである。その内訳は3年生3クラス、5年生5クラス、6年生3クラスである。児童は総計で278名がアンケート調査に協力していただいた。

表 1. 見学クラス人数および好意度平均値

	学校名	クラス名	人数	好意度平均値	指導体制	時期
3 年生	B	3-1	25	3.60	専科+ALT	2017
	I	3-2	38	3.45	HRT+ALT	2019
	Y	3-1	26	3.27	HRT	2019
5 年生	O	5-1	41	3.37	HRT	2018
	B	5-1	19	3.74	専科+ALT	2017
	B	5-2	21	3.52	専科+ALT	2017
	I	5-3	28	3.14	HRT+ALT	2019
	Y	5-1	20	2.80	HRT+ALT	2019
6 年生	G	6-1	22	3.55	HRT	2018
	L	6-1	18	3.28	HRT	2018
	M	6-1	20	3.00	専科+ALT+HRT	2019
総計			278	3.35		

児童の英語授業の好意度は、総じては 3.35 と 3 をかなり超えており、授業が好きな児童が多いことがわかる。便宜上、平均値が 3.5 以上を超える授業を高好意度授業、平均値が 3 以下を低好意度授業とする。また、3 年生において、好意度が 3 以下のクラスはないため、高好意度授業と低好意度授業を比較することが困難である。よって、3 年生は分析の対象から除外した。結果、高好意度授業は 3 つ(B5-1, B5-2, G6-1)、低好意度授業は 2 つ(Y5-1, M6-1)となった。分析対象クラスを増やすために、前回の科研費研究で調査した授業のうち、好意度平均値が 3.5 以上の授業 2 つ、好意度平均値が 3 以下の授業 3 つを追加した(表 2 参照)。

表 2. 追加した高好意度クラスおよび低好意度クラス

	学校名	クラス名	人数	好意度平均値	指導体制	時期
5 年生	B	5-1	32	3.59	HRT+ALT	2013
6 年生	E	6-1	28	3.64	ALT+HRT	2014
	U	6-4	33	2.94	ALT+HRT	2013
	A	6-2	30	2.94	ALT+HRT	2013
	H	6-2	30	2.50	ALT+専科	2015

本研究では高好意度授業 5 つ、低好意度授業 5 つの合計 10 クラスの英語授業を主に質的に分析する。また、同じ授業内容を扱っているクラスが 2 つあり(E6-1, 2014 および M6-1, 2019)、具体的に授業内容を比較する。

#### 4. 研究成果

##### 1) 高好意度クラスに見られる言語活動の特徴

主な特徴 は、(1) 身体運動や具体的な体験活動がある、(2) Interactive な活動がある、(3) 変化のある言語活動がある、(4) 扱う構文が限定的である、(5) 楽しく、安心して学習できる学習環境である、の 5 つである。それぞれの特徴について具体例を示す。

##### (1) 身体運動や具体的な体験活動がある。

Greeting 後、Alphabet song を歌うが、小文字(a,b,c,d,e,f,g,...) のうち、b,d,f のように縦棒がある際は片腕を真っ直ぐ上げ、g, j はしゃがむを動作をする。(B5-1, 3.74, 2017) (= 学校名、クラス名、授業好意度、時期の順序を示す、以下同様)

文字(w, x)のなぞりの活動(体験的活動)があり、児童はアンケートの楽しかったことに関する自由記述のなかで、色ぬりや字をきれいに書けたとの記述がみられた。(B5-1, 3.74, 2017)

##### (2) Interactive (学習者相互のやり取り) な活動がある。

ALT の発音を聞いて、4 人グループで相談して、発音された英単語を書き、正解だと点数を獲得できる活動について、アンケートへの自由記述の中で、児童は皆と楽しくできる、分からないことは皆で話し合うと述べている。(B5-1, 3.74, 2017)

スピーチ作成後、グループ内で発表し、その後グループ外でやり取りをする。“What do you want to be?” の活動である。自由記述の中で、児童は友達の夢も知れるし、自分の夢も知ってもらえる。みんなの職業がわかったと書いていた。(E6-1, 3.64, 2014)

クリスマス・プレゼントに何が欲しいかについて、“What do you want?” の表現を使用して聞きあうことについて、児童は、アンケートへの自由記述の中で、みんなのほしいものがわかったとか、普段はそんなことはきかないなどの記述がみられた。また、普段、話をする人がない人と話ができたとのアンケートへの記述も見られた。(B5-1, 3.59, 2013)

My Best Memory について話すとき、児童はペアの相手を変えながら、小学校 6 年間のうち一番思い出に残っている思い出を、理由を含め伝え合った。児童のアンケートへの楽しかった活動の自由記述には「自分の一番の思い出を話したこと。いろんな写真を見たり感想やしたことを言えたから。」と身近な話題でやり取りができたことを楽しかった理由に挙げていた。(G6-1, 3.55, 2019)

(3) 変化のある言語活動がある。

チャンツを用いることで、反復練習に変化をもたせている。

ALT が、“What, what, what do you want to be? A singer, a singer, a singer, a singer, a singer.” のように、“what”と “a singer” をチャンツを用いて反復練習をした。(E6-1, 3.64, 2014)

(4) 授業で扱う構文が限られている。

スピーチ活動において扱った構文は次の 2 つだけである。“What do you want to be?” および “I want to be ~.” (E6-1, 3.64, 2014)

クリスマス・プレゼントに何が欲しいかについての活動において、扱った構文は次の 2 つのみである。“What do you want?” および “I want ~.” また、答える際に、“I want めいぐるみ.” のように、欲しいものを分からなければ日本語でよいとした。(B5-1, 3.59, 2013)

(5) 楽しく、安心して学習できる学習環境

自由記述の中に、みんなの前でスピーチするのは苦手だけど、「落ち着いて」と声をかけてくれた、のような児童の記述がみられた。(E6-1, 3.64, 2014)

児童の発表を、他の児童が称賛する機会がある。反復練習の中で、ALT がある児童に “What do you want to be?” と質問し、その児童が “A singer” と答えることができた時、ALT は “Oh, great.” と反応し、他の児童も拍手をして称賛した。(E6-1, 3.64, 2014)

自由記述の中で、児童は皆で笑顔で楽しくできたことを報告している。(B5-1, 2017, 3.74) (B5-2, 3.52, 2017)。みんなと一緒に話すと楽しい。(G6-1, 3.55, 2019)

## 2) 低好意度授業に見られる特徴

その主な特徴は 4 つである。(1) 過度な反復練習、(2) 扱う項目(単語、動画)が多い、(3) 安心して学習できない雰囲気、(4) 形式(form)に着目しすぎる活動が多い。

(1) 過度な反復練習。

“Where do you want to go?” の疑問文を練習する際、ALT は個々の単語を一つずつ発音し、それを少しずつ長くして最終的に目標構文に言わせようとしていた。“where, do, you, want, to, go” と 1 語ずつ反復させ、次に “where do you, where do you want, where do you want to” のように、ただ反復練習をさせた。(H6-2, 2.50, 2015)

国や場所の名前も単純反復練習を行った。ALT は “France, France, France” と 1 語ずつ反復練習をさせ、“Italy, Germany, South Korea, the United States, library” などを同様の方法で実施した。(H6-2, 2.50, 2015,)

(2) 扱う項目(単語、動画)が多い。

1 時間で 16 の国の名前(Germany, UK, Brazil, Russia... など)を反復練習する。(A6-2, 2.94, 2013) 動詞の種類が多い。ALT: “Where do you want to go?” HRT: “I want to go to Japan. I want to see a soccer game. I want to eat sushi. I want to play baseball. I want to buy T-shirts. I want to climb Mt. Fuji.” この会話モデルには “want” 以外に、“go, see, eat, play, buy, climb” の 6 種類の動詞が使用されており、児童はこのモデルに基づいてペアワークをすることを求められた。(A6-2, 2.94, 2013)

Y5-1 は、“We can!!” の Unit 4 の動画 3 つを視聴し、ALT が内容を理解させようとしていた。この活動に 10 分程度費やし、特に児童の日常生活に結び付けなかったこともあり、児童は飽きているように見えた。(Y5-1, 2.80, 2019)

(3) 安心して学習できない雰囲気

ALT が質問をし、児童を指名するのだが、これをくじ引きによって決めていた。アンケートへの自由記述への回答で、「ALT の先生のくじ引きが好きではありません。次に自分にあたるのではないかと不安になります。話すのが嫌です。」の回答が見られた。(U6-4, 2.93, 2013)

(4) 形式(form)に着目しすぎる活動

児童は “What time do you get up?” の質問を 3 分間で、できるだけ多くのクラスメートに質問し合う活動であるが、ALT は Eye contact, Big Voice, Smile, Reactions, No Japanese を児童に確認させて行った。これらの特徴はいずれも、話し方、(非言語的)形式に関するもので、意味

に関するものでない。結果児童は、相手が何時に起きているのかに、つまり意味に着目することはあまりなかった。(Y5-1, 2.80, 2019)

### 3) 同一内容を扱った2つの授業の比較

“What do you want to be~?” のトピックを扱った2つの授業 E6-1(3.64, 2014)および M6-1 (3.00, 2019)を質的に分析することで、児童の好きな英語授業の特徴を明らかにしようとするものである。この2つのクラスの授業好意度には有意的差がある( $U = 155.00, p < .01$ , 両側)。この2つの授業は、将来何になりたいかについてのスピーチ活動を含んでおり、両方ともチーム・ティーチングによる授業ではあるものの、主指導者は学級担任ではない。主指導者は E6-1 では ALT、M6-1 では専科教師である。

E6-1 のアンケートへの自由記述では、28名のうち20名(71.4%)もの児童が、スピーチ活動が楽しかったと言及する一方、M6-1 ではスピーチ活動が楽しかったと言及した児童は誰もいなかった。E6-1 の授業の主な特徴は、意味中心であり、形式に着目する言語活動(仕事の名前や構文等の反復練習)はあるものの、およそ5分程度で、残りの活動は意味中心の活動である。ALT が読み上げるテキストのスピーチの例を聞く際に、児童は、スピーカーの名前、好きなこと、なりたい職業に着目して、メモを取った。スピーチ活動においては、クラスメートのスピーチを聞く際は、将来何になりたいのかについて注意を払った。

一方、M6-1 のスピーチ活動は、スピーチの内容よりもむしろ、形式(今回は非言語的形式)に着目した。ALT のデモンストレーションを含め、Eye contact, Voice volume, Smile などの話し方の観点から、互いにスピーチを評価し合った。クラスメートが将来何になりたいかについては、着目していないのである。第2言語習得文献調査からは、児童のような初学者の場合、認知的、記憶的にも、形式と意味の両方に注意を払うことは困難であり、意味に着目する傾向にあることがわかっている。

### 4) まとめ

本研究では、高好意度授業および低好意度授業の質的分析を行った。高好意度授業の主な特徴は、(1) 身体運動や具体的体験活動がある、(2) Interactive な活動がある、(3) 変化のある言語活動がある、(4) 扱う構文が限定的である、(5) 楽しく、安心して学習できる学習環境である、一方、低好意度授業の特徴は、(1) 過度な反復練習、(2) 扱う項目(単語、動画)が多い、(3) 安心して学習できない雰囲気、(4) 形式(form)に着目しすぎる活動が多い、の4つである。また、同一内容を扱った2つのクラスの比較からは、小学生のような英語を学びたての学習者には、形式ではなく、意味中心の言語活動が大切であることがわかった。

### 引用文献

- 猪井 新一 (2014). 「児童の外国語活動に対する態度や英語学習意欲はどのような要因によって影響を受けているのか」『第14回小学校英語教育学会(JES)神奈川大会要綱集』p. 34, 小学校英語教育学会.
- 猪井 新一 (2015). 「児童が好む英語の授業とそうでない授業の質的分析」『茨城大学教育実践研究』34, 69-80.
- 植松 茂男 (2014). 「特区における小学校英語活動の長期的効果の研究-6年間の継続調査のまとめ-」[https://ksurep.kyoto-su.ac.jp.dspace/bitstream/109654/113/1/TPRB\\_G\\_17](https://ksurep.kyoto-su.ac.jp.dspace/bitstream/109654/113/1/TPRB_G_17).
- 太田 洋 (2013). 児童・生徒の意識調査と言語習得研究の観点による小中連携の授業」科学研究費事業(科学研究費補助金)研究成果報告書基盤研究(C)22520634, [https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2012/seika/C-19\\_1/32696/22520634seika.pdf](https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2012/seika/C-19_1/32696/22520634seika.pdf).
- 淵上 啓子 (2008). 「小学校での英語活動経験者は中学1年時にその活動をどう評価しているか」『STEP BULLETIN』Vol. 20, pp.197-212. 日本英語検定協会.
- ベネッセ (2011). 「小・中学校の英語教育に関する調査 - 中学1年生の目から見た英語教育とは? -」ベネッセ.
- Curtain, H., & Dahlberg, C. A. (2010). *Languages and Children: Making the Match – New Languages for Young Learners, Grades K – 8* (4th ed.). Pearson Education.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and Researching Motivation* (2nd ed.). Pearson Education
- Ellis, R. (2008). Principles of instructed second language acquisition. CAL: Center for Applied Linguistics. [http://www.cal.org/resource-center/resource-archive/digests/\(offset\)/75](http://www.cal.org/resource-center/resource-archive/digests/(offset)/75).
- Muñoz, C. (2007). Age-related differences and second language learning practice. In DeKeyser, R. M. (Ed.), *Practice in a Second Language: Perspectives from Applied Linguistics and Cognitive Psychology*, pp. 229-255. Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. & Newton, J. (2009). *Teaching ESL/EFL Listening and Speaking*. Routledge.
- Ortega, L. (2007). Meaningful L2 practice in foreign language classrooms: A cognitive-interactionist SLA perspective. In R. M. DeKeyser (Ed.), *Practice in a Second Language: Perspectives from Applied Linguistics and Cognitive Psychology* (pp. 180-207). Cambridge University Press.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 下 薫 ・ 猪井 新一	4. 巻 38
2. 論文標題 小学校英語教育におけるチャンクを利用した音声指導および読み書き指導への橋渡し	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 猪井 新一・真歩仁 しょうん	4. 巻 69
2. 論文標題 小学校英語授業におけるHRTのT1化を目指して-ELFの観点から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 197-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Shinichi Inoi	4. 巻 -
2. 論文標題 Meaning-Focused vs. Form-Focused Activities in Elementary School English Lessons	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Extended Summaries-The 27th Korea TESOL International Conference 2019	6. 最初と最後の頁 23-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Shinichi Inoi	4. 巻 -
2. 論文標題 Meaning-Focused vs. Form-Focused Activities in Elementary School English Lessons	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 KOTESOL PROCEEDINGS 2019	6. 最初と最後の頁 82-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 INOI, Shin'ichi	4. 巻 CLaSIC2018
2. 論文標題 QUALITATIVE ANALYSIS OF PRIMARY SCHOOL ENGLISH LESSONS IN JAPAN IN TERMS OF STUDENTS' ENJOYMENT AND MOTIVATION LEVELS	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Eighth CLS International Conference (CLaSIC2018) Proceeding Papers (National University of Singapore)	6. 最初と最後の頁 60-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 猪井 新一	4. 巻 36
2. 論文標題 小学校英語における読み書き導入および中学校英語科との連結	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 茨城大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 159 -171
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shin'ichi INOI	4. 巻 67
2. 論文標題 Determining a Relationship Between HRT and Student Attitudes Toward Primary School English Lessons in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要. 教育科学	6. 最初と最後の頁 373 -384
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 猪井 新一	4. 巻 予稿集
2. 論文標題 望ましい小学校英語授業とはどのような特徴をもつのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語教育エキスポ 2018 予稿集	6. 最初と最後の頁 82-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Shinichi Inoi
2. 発表標題 Meaning-Focused vs. Form-Focused Activities in Elementary School English Lessons
3. 学会等名 The 27th Annual Korea TESOL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪井 新一
2. 発表標題 外国語指導協力員とのインタビュー から見える小学校英語授業の実情 - HRTのT1化を目指して -
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 猪井 新一
2. 発表標題 言語活動の特徴から見る児童の好きな英語授業
3. 学会等名 第19回小学校英語教育学会 (JES) 北海道大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 INOI, Shin'ichi
2. 発表標題 QUALITATIVE ANALYSIS OF PRIMARY SCHOOL ENGLISH LESSONS IN JAPAN IN TERMS OF STUDENTS' ENJOYMENT AND MOTIVATION LEVELS
3. 学会等名 The Eighth CLS International conference (CLaSIC 2018) (National University of Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 猪井 新一
2. 発表標題 児童の好む英語の授業とはどのような特徴をもつのか
3. 学会等名 第44回全国英語教育学会京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猪井 新一
2. 発表標題 児童の高好意度英語授業と低好意度英語授業の比較－振り返り分析を通して－
3. 学会等名 第18回小学校英語教育学会 (JES)長崎大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猪井 新一
2. 発表標題 望ましい小学校英語授業とはどのような特徴をもつのか
3. 学会等名 言語教育エキスポ 2018 (早稲田大学において)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 猪井 新一
2. 発表標題 外国語活動における児童の英語学習態度はHRTによって影響をうけているのか?
3. 学会等名 第16回小学校英語教育学会 (JES)宮城大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 猪井 新一、齋藤 英敏、小林 翔	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 学級担任が創る小学校英語の授業	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----